

続 藍染を後世に

目下田 正

(染織家・栃木県無形文化財指定)

平成8年本誌685号に「藍染を後世に」と題した一文を載せていただいたから15年の時が経過いたしました。前回書けなかったこと、この15年の間に経験したこと、考えたことなどを書かせていただきます。

藍は、永い世界の歴史の歩みのなかで多くの民族の衣装を彩ってきた代表的な植物染料であります。我々が現在見ることが出来る最も古い藍染は、エジプトの墓から発見された亜麻の布に染められた青色と言われております。アメリカのメトロポリタン美術館が所有しているこの布を科学分析した結果、紀元前2000年頃に染められた色と判明しました。数千年以上前から人間は藍染の技術を確立していたことになりましたが、近世から現代にかけてはジャパン・ブルーと呼ばれる日本の藍染の評価が高いようです。特に江戸の職人文化、町人文化の高揚が技術を飛躍的に高め、世界に賞賛される最も繊細な色として完成したのだと思います。

藍からは白に近い気品ある薄青から、染め重ねることで濃い紺色までそれぞれの色相が得られます。江戸時代の色名帖には藍の濃淡の色名が、薄い色から順番に(1)かめのぞき(2)水色(3)水浅黄(4)薄浅黄(5)るり色(6)浅黄(7)空色(8)露草色(9)千草(10)朝縹(11)縹(12)花田(13)花色(14)勝色(15)深縹(16)紺とあります。時代によって色名が変化する場合がありますが、16色の色を見分け、染め分け、使い分けたという先人たちの技術レベルの高さ、目の確かさには驚嘆してしまいます。明治23年に来日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、日本の印象を「この国は大気全体が心持ち青みを帯びて異常なほど澄み渡っている。青い屋根の下の家も小さく、青い暖簾を下げた店も小さく、青い着物を着て笑っている人も小さいのだった。」と書いています。ハーンにとって日本は神秘のブルーに満ちた国だったようです。

現代でも日本の藍染に魅せられる外国人は少なくないようです。

数年前、東京の知人からイギリスのロンドン大学の学生が日本の藍染の体験を希望しているので半月ほど面倒をみてもらえないかと頼まれ、待っていたところに現れたのは52歳の女子大生だったので驚きました。彼女は弁護士のカリヤアをお休みして大学でテキスタイルアートを学ばたいへん優秀な女性でした。

現在も、私の仕事場で藍染の勉強をしているアメリカ国籍の20代の女性がおります。アメリカの美術大学で工芸を

学び、将来自分の藍染の作品を通して日本の藍染をアメリカに紹介したいという志をもって、一生懸命勉強しております。

私は栃木県立宇都宮白楊高等学校服飾デザイン科の非常勤講師として、週1回3時間の授業を3年生に対して行っております。物づくりの世界、職人の世界で長年生きてきた私が教壇に立つとまどいは20年近く経験を積んできた現在でも拭うことができませんが、服飾デザインを学ぶ生徒が将来テキスタイル・服飾デザインの分野で活躍することを願って、「織物」の授業を担当しております。全国的に見ても公立の高等学校では他に例の少ない授業名と思いますが、この授業創設を決断された初代服飾デザイン科科长先生の想いに応えるためにも力を尽くしていきたいと思っております。

羊の毛を天然染料（草木染）で種々の色に染め、その中からイメージに合った色を選び、或いは何種類かの色を混合し、自分だけの色を作り、紡ぎ、織る。その一連の作業を通して物づくりの楽しさ、喜びを感じ、少しづつ織り上がっていく布から自分のデザインをイメージする。このような授業を目指して毎年生徒と一緒に試行錯誤を繰り返しております。

先日10年ほど前に卒業した教え子が、1枚の英字新聞をもって訪ねてきてくれました。アメリカに留学し、そのままニューヨークの織物会社に就職して試織のセクションで働いているとのことなのですが、その教え子が織り上げた

布がニューヨークで活躍するファッションデザイナー、アナ・スイの目に留まり、ファッションショーでも用いられたという報告でした。ショーの載っているニューヨーク・タイムズを広げて、このモデルの衣装ですと見せてくれました。

東京では、やはり卒業生が自分のブランドを立ち上げたとききました。若者たちが頑張って自分の世界を確立していくことを願うばかりです。

平成9年10月に、益子陶芸美術館で『イギリス工芸運動と濱田庄司』という展覧会が開催されたのですが、その前年、私はこの展覧会の企画者である益子陶芸美術館のキュレーターと一緒に、展覧会のリサーチのためにイギリス西部の田舎の美術館を訪ね歩いておりました。結果的にリサーチ、交渉もうまく進み、イギリスの美術館からも沢山の作品をお借りすることが出来、益子を皮切りに東京・千葉・大阪・広島の美術館を巡回した展覧会は好評裡に終了いたしました。

この展覧会のテーマのひとつに、イギリスから帰国した濱田先生がなぜ仕事の間として益子を選んだのか、があります。先生は著書『無盡蔵』で次の様に述べておられます。

「五・六十年前まで関東一帯どこでもみかけた土瓶があった。黄ばんだ白い肌黒い線と茶や経で簡単な山水の絵付けがしてあって、私は芝の小学校で、弁当のお茶にも、習字の時間の水注にもこの土瓶を使った。これが栃木県の益子で出来ることを聞き、大正9年春初めて私は益子を訪れ

た。その夏バーナード・リーチと英国へ渡り、コーンウォールの漁村セント・アイヴスへ東洋風の登窯を築き、土を探し、薪を割って3年余りを送ったが、狭い町で、肌を通してうけた英国の田舎の暮らしは、その後の私の生活に忘れがたいものを残した。各地の古い教会や、民家の建物からも強い感銘をうけたが、とりわけサセックスのデイツリングに織物をしていたエセル・メーレ夫人や彫刻をしていたエリック・ギルの生活と仕事とを何度か訪ねたことは、日本へ帰ってから是非田舎へ入ろうと思わせ、東京で育った私を同じ関東の益子へ住む決心をさせた。東京の近くにこれほどまでに乱れていない窯場があるとは思いがけなく、私は東京の学校や、京都の試験所で学んだものをひと流しして、暮らしにも仕事にも一途に健康さを求めた。」

後に陶芸の里、益子の名を世界に広めた濱田先生と益子町の最初の出会いです。

私の父、博は平成15年93歳で亡くなりましたが、生前よく話していた濱田先生の話があります。

昭和10年ごろの益子の町にはまだ様々な日常生活品を作る職人・工人の家がありました。それは鍛冶屋であつたり、家具屋であつたり、カゴ屋であつたり、紺屋であつたりしたので、職人の家の後継者の若者に呼びかけて焼き物だけでなく、それ以外の手仕事も頑張つて「益子を手仕事の町にしよう」と提案し、勉強会を主宰したのが濱田庄司先生でありました。先生はみずから鍛冶屋には照明器具を、

家具屋には階段箆筒を、竹細工屋には竹製の籬すたれを、紺屋には藍染木綿を発注し、若者達を励まし続けたそうです。昭和の初めの益子の町にこのような動きがあったことを覚えておくようにとの父の言葉でした。

その後日本は太平洋戦争に突入していき、敗戦があり戦後の厳しい生活が続く結果的には焼き物だけが残った形になりましたが、濱田先生は終生「手仕事村構想」の夢を持ち続けられた事を濱田家の方からお聞きして、改めて頭の下がる思いがいたしました。

3月11日の東日本大震災で、濱田先生の遺された美術館『益子参考館』は甚大な被害を受けました。早速「益子参考館再建委員会」が組織され、再建に向けての活動が始まりました。

私の所の江戸時代から使い続けている常滑産の藍甕の埋まっている仕事場「甕場」も、今迄経験したことのない揺れに見舞われ、藍の液が相当量飛び出たので甕が割れたか、あるいはヒビが入ったかと大変心配しましたが、1カ月程毎日慎重に観察を続けた結果無事であったことが分かり、ほっとしたと同時に昔の職人の仕事の確かさに感心いたしました。

展示会のためのリサーチを行う目的でイギリス南西部の美術館を訪ね歩いたことは前述しましたが、ある美術館のとなりのギャラリーで開かれていた女流染色家の展示会を見る機会がありました。

会場で作家といろいろ話をしましたが、私が日本の藍染業と自己紹介しますと、会場の奥から講談社から出版された英文の分厚い作品集を抱えて持ってきてくれました。それは絞り加工を行った日本の藍染の布の作品集でした。

彼女は、日本で藍染の技術を習得し、それを自分の作品に反映させたいという夢を熱っぽく語ってくれました。彼女の夢が叶うことを願っています。

平成9年には、フランスの一般の方々に日本の草木染を紹介する機会にも恵まれました。南フランスのヴォークリューズ県と栃木県の姉妹県交流事業として『とちぎプロバンス工芸展』がヴォークリューズ県アヴィニオンで開催され、下野手仕事会の仲間3人で参加してきました。私の役割は藍染のデモンストレーションでした。染料である藍玉の持込みは可能か、フランスの水はどうかなど、心配事が多々あったのですが、無事クリアでき、染めた藍染の布を見学者に差し上げることができました。

平成21年には、栃木県知事を団長とするヴォークリューズ県訪問団としてアヴィニオンを再訪いたしました。プラタナスの枯葉が風に舞う美しい晩秋の頃でした。今回も私の仕事は栃木県の伝統工芸の紹介でしたので、天然染料を使った伝統的染法で40色に染め分けた40枚の絹布と、自家栽培をした綿を糸に紡ぎ織った綿布を江戸時代の色名帖に合わせて、白に近い薄青かめのぞきから最も濃い藍色（紺）まで濃淡16色に染めたサンプルを展示いたしました。展示会場が文化財として管理されている、かのマルキ・ド・サド侯爵邸であったため展示方

法に制約がありましたが、多くの方々に見ていただくことができました。モヒカン刈の高校生が草木染の色を「やさしい色」と表現してくれたり、老婦人が藍の濃淡のグラデーションの布を見て「このジャパン・ブルーをフランスに置いていきなさい」と言ってくれたりしました。

南フランスプロヴァンス地方は、合成染料が発明されるまでは茜色を染める染料である西洋茜を栽培し、茜草の根を各地に送り出しておりました。プロヴァンス出身の昆虫学者ファーブルは、地場産業であった茜草の染め方の研究者としてもフランスの第一人者でありました。そのため今回、西洋茜で染めた布を意識的に多く展示しましたが、ファーブルが活躍した頃から150年の年月が経っておりますので、気がついた見学者は残念ながらおりませんでした。

昭和62年、京都国際会議場で開催された世界織物会議で基調講演を行ったハーバード大学の社会学者、タマラ教授の言葉があります。「現在、世界的に伝統工芸は非常に厳しい状況下にある。しかし人類は地球規模の環境破壊の反省から、今後、自然回帰、土に帰ろうの潮流が起こってくるだろう。伝統工芸が見直されるときが必ず来る。」フクシマの原発事故を経た今、よりいっそう重みのある言葉に思えてなりません。

これからも多くの方との出会いに感謝しつつ、現代における藍染の可能性を探りながら益子の紺屋として前に進む以外にないと思っております。